女性農業者交流会～ランチ＆ミーティング～

日　時：　令和４年 11 月 17 日（木曜日）12 時 30 分～14 時 30 分
場　所：　金沢広坂合同庁舎
参加者：　石川県内の女性農業者６名

本年６月 30 日に開催した女性農業者交流会において、「石川県内の女性農業者間で繋がる場があれば」という声をいただき、今回は石川県内の女性農業者を対象とした交流会を開催しました。

リラックスした雰囲気の中で話ができるよう、はじめに「家庭料理と野菜マルシェ 畑の子」のお弁当を食べた後、参加者から簡単に自己紹介をしてもらい、意見交換をすることとしました。

参加者に PR したい、意見を求めたい農産物や加工品がある方は持ち込み可能です、と呼びかけたところ、２名の方が「へちまたわし」、「マスタード（注）」を紹介されました。
（注）加賀野菜の１つである二塚からしなの種で製造。

自社栽培の野菜、農業女子仲間から仕入れたこだわりの食材を使用した「畑の子」のお弁当

【意見交換での発言の一部】

＜加工について＞
・市場を通すと、全部買ってくれるが値段は決められてしまう。本当は自分で値段を決めたい。野菜の加工にも興味があり、しょうがパウダーを作ってみたい。
→保健所が申請や施設等について相談に乗ってくれると思う。業者も教えてくれる。

・加工など新しいことに取り組みたい気持ちがあっても忙しくてすぐに動けないため、タイミングが合わない。規格外品を出した人が自ら加工もできればベスト。

でも、規格外品が出るのは農産物の収穫時期であり、一番忙しいときであるため、自分で加工する時間がない。農繁期にやりたかったら、家族が仕事をしている中、自分だけ抜けて加工するか、加工専門の者を雇用するか考える必要がある。

・他にも加工に取り組みたい農家がいれば、全農や JA に相談し、共同加工場を建ててもらうのも一つの手ではないか。金沢市には JA の共同加工場があり、利用にお金はかかるが、自分で加工場を建てるリスクや労力を考えると、そちらのほうが良いかもしれない。

＜販売について＞
・マルシェについて、「収穫期で忙しく、売り場に立てないため売れない」ではなく、そのときに手が空いている人が売り子になることで、みんなの商品を売ることができる。
ただし、生産者の顔も商品の良さもわからない状態で売るのは難しいため、だれが作っていて、どういうこだわりがあるのかを学びながら進めていきたいと思い、できるだけ顔を合わせる機会を作ろうとしている。

・ほかのものはどんどん価格が上がるのに、日本で作った野菜の価格が高くならないのが不思議。作るためのコストは確実に上がっているのに野菜の値段は上がらない。どうやって消

費者の意識を変えていけばいいのか。
→今年は値段を上げていい年。値引きに応じなくてもよい。石川県は地場産の野菜が少ない。先日、総合スーパーのバイヤーなどと話す機会があったが、「少なくてもいいから欲しい。当然、再生産できる価格で買う。」と言っていた。GAP までいかなくてもきちんと記録をつけて、売り込んでいくべき時。野菜を買いたい人は多いため、伸びしろがある。

＜その他＞
・アルバイトの募集はどのように行っているか。
→JA の無料サイトに載せてもらったり、口コミで募集している。若手に来てほしいが、働く場所が多く時給が高い地域だと農作業に若手を集めることは難しい。

・前回の女性農業者交流会で知り合った、富山県、福井県の女性農業者と交流している。
富山県の方は先日、金沢に視察に来られ、次回はこちらから富山に視察に行く予定。
また、一昨日には、金沢市の女性農業者グループのメンバーとともに、福井県の方の経営するカフェを訪問した。前回の交流会で２人に知り合えて良かったと思う。

・SNS での情報発信は大切。Instagram は投稿しやすく、ハッシュタグ（＃農業女子、＃農ガールなど）をつければ繋がっていくのでオンライン上での交流が可能。

「家庭料理と野菜マルシェ 畑の子」の見学

ランチ＆ミーティング終了後、希望者は「家庭料理と野菜マルシェ 畑の子」に見学に行きました。

経営者の濱田友紀さんは、石川県羽咋市の農事組合法人アグリスターオナガで野菜等の生産に携わってきた方で、本年３月に「畑の子」を開店しました。

・食材は石川県産のものにこだわっており、野菜は自社と県内の農業女子仲間から仕入れ、味噌や揚げ物に使う米粉も県内の農業女子仲間が加工したものを使用している、
・自社の野菜生産の仕事はこれまで少しずつスタッフに任せ、人材を育ててきたので安心してお店の経営ができる、

などのお話が濱田さんからあり、参加者は聞き入っていました。

意見交換終了後は、総合スーパーのバイヤーへの連絡方法について質問が出たり、Instagram に詳しい参加者が、使ったことがない参加者に使い方を教えてあげていたりと参加者の間で交流が生まれていました。

また、見学参加者の野菜が後日「畑の子」で販売されるなどの動きもあり、今後も引き続き、このような交流の場を企画していきたいと思います。